英語を学習する意味が見いだせない学習者のための自律学習の開発 (3)
ー学生の学習過程からー
A Framework for Designing Autonomous Learning in English Writing Class for Disinterested Learners 3: from a Viewpoint of Students' Studying Processes

○東郷多津[1)]　望月紫帆[2)]　高橋朋子[3)]　中植正剛[4)]　山崎瞳[5)]
TOGO Tazu　MOCHIZUKI Shiho　TAKAHASHI Tomoko　NAKAUE Masataka　YAMASAKI Hitomi
[1)] 京都ノートルダム女子大学 [2)] NPO 法人学習開発研究所
[3)] 武庫川女子大学 [4)] 神戸親和女子大学 [5)] 環太平洋大学
[1)] Kyoto Notre Dame University [2)] Institute for Learning Development
[3)] Mukogawa Women's University [4)] Kobe Shinwa Women's University [5)] International Pacific University

要約　高等教育、特に私立大学の一般目的の英語の授業は、多様化する社会のニーズと同じく多様化する学生の間で、常に学習の質と学生の能力とクラス数とのバランスを模索しなければならない。今後は、多様な学生に対応する授業に適した新たな教育技術を、プロジェクトチームで開発していくアプローチが重要である。本稿では、プロジェクトチームで開発している再履修生のための英語の授業の中で、単位を取得した学生の学習プロセスに着目し、開発した授業と学習資材の効果と問題点を検証する。

キーワード　指導技術　授業実践　教材開発　自律学習　プロジェクトチーム　英語

１．はじめに

高等教育段階での英語へのニーズは高まり、その必要性も多様化している。一方、大学入試の多様化により、大学の英語の授業では、運用能力や学習に対する意味づけの多様な学生が混在している場合も多い。

特に私立のリベラルアーツ系大学の場合、経営上の問題から学生の確保が必至である。そのため学生はより多様化しているにもかかわらず、英語の授業のうち、特に一般目的の英語の授業（English for General Purposes　以下 EGP）は常に学習の質保証と学生の能力とクラス数とのバランスを模索しなければならない状態に陥っている。

英語の運用能力や学習に対する意味づけの多様な学生が混在するような EGP の授業では、学習する意味を見出せない理由とその対応が個別的であるので、従来の教師側が与える学習目標や教科目標では授業が成立しなくなっている。このような授業の開発を行う場合は、従来のように一方的に学習理論や方法論を適用するのではなく、このような授業に適した教育技術を開発しなければならない。しかしながら、学生が多様化するほど教師一人で問題を特定し、授業を設計していくには限界がある。また、学習の意味を見いだせないという点において英語に限らず共通の悩みを抱える教師も多い。そのため、今後は授業をプロジェクトチームで開発していくアプローチが重要である。

そこで複数の大学の教員らとともにプロジェクトチームを組織し、多様な知識や動機を持つ学習者がともに自律学習できる授業を目指して、NPO 法人学習開発研究所（代表　西之園晴夫）が開発している教材開発の方法論を適用した教材開発を行っている。

２．目的

授業開発の枠組みや開発した学習資材の効果と問題点についてはすでに紹介した（東郷 2007、東郷他 2007）。そこで、本稿では学生の学習過程を分析し解釈することによって、現段階での授業開発についての現状を把握し、今回開発した学習資材について検証する。

３．研究の対象

3-1.　対象となる授業

対象授業：英語(Writing)　（1 年次生必修科目、Writing クラス共通のテキストあり）

対象者：私立女子大学、英語を専門としない学部の再履修生 10 名（2 年次生 8 名、3 年次生 2 名）

授業期間：2007 年 4 月 11 日～7 月 25 日

履修の目的：単位取得

3-2.　開発した授業

プロジェクトチームでは再履修生の特徴を仮定

し、その上で「健康管理」をメタファーとして共通理解を図り、「学生が主体的に学習を計画、実行することで単位を取得できる」ことを、教師と学生の双方が理解することができる英語学習の共同開発を行った。メタファーにしたがって開発した学習資材は、「腕試しテスト」、「診断テスト」、「学習マップ」、「学習計画シート」、「査定シート」、「メニューシール」である。

各学習資材は、学生が共通テキストをもとに、自律学習する補助資料として作成された。「腕試しテスト」は自分がテキストのどのチャプターから学習を開始できかの目安となるものである。このテスト結果から、学生は「学習マップ」を参照しながら「学習計画シート」に自分の目指すゴールを記入する。学生が単位を取得するためには、点数と点数の取り方に対して課せられた２つの条件をクリアしなければならなかった。

3-3. 学生の学習過程

【学習者 A さんの事例】

(1) 出席状況と点数：１，３，６(10p)，７，８，11(27p)，12，15(42p)回目の授業

(2) 学生の学習過程

［授業の様子］〈5 月 23 日観察日誌より抜粋〉
10:05 ＡＩＮ〈入室の意味〉教科書持っていない Chapter 1 のパンにとりくむ　ポイント表〈「学習マップ」のこと〉の<u>とりくむ課題にしるしをつけてある</u>

＊〈 〉と下線は発表者による

学習者 A は学習計画を 30 分以内でたてた。計画通りに「学習マップ」にしるしをつけ、それにしたがってテキストの問題に解答していた。学習者は計画通りの点数を取り単位を取得した。

【学習者Ｃさんの事例】

(1) 出席状況と点数：１，２，３，４，５，14(18p)，15(42p)回目の授業

(2) 学生の学習実態

［授業の様子］〈7 月 18 日観察日誌より抜粋〉
10:26〈教師が〉学習計画のための用紙を渡す
Ｃ　<u>計画がうまくたてられない</u>（およそ 60 ポイントに近づけないプランをたてる)

＊〈 〉と下線は発表者による

学習者Ｃは他の学生とともに２度目の授業で計画表を提出している。しかし３度目の授業において 30 分以上学習マップとテキストを交互に見比べるなど、計画を書いたもののそれにしたがって進めることができなかった。途中で単位をとれないと思い授業へ来なくなったが、再び授業に現れた 14 度目の授業でも計画は立っていないことがわかる。最終的には教師の補助で単位取得にいたった。

４．まとめと今後の課題

学生の学習プロセスを分析した結果、単位取得した学生の中にも違いがあることがわかった。学生は初めにたてた学習計画に従って学習を進めていたが、学生側に単位を取得したいという明確な目的意識がなければ、実際の学習に結びついていないことがわかった。ただし、どちらの学生も初めの計画通りに学習を遂行しようとした点は共通していた。

今後は、学生の学習過程に影響を与えることがわかった学習計画の段階を調整することにより、学生が実際の学習を行うにあたってよりどころとなるような学習計画を立てられる学習過程を設計し、そのために必要な学習資材を開発する必要がある。また、続けて学習する意味が見いだせない学生の特質を分析、解釈し、授業開発に適用していきたい。

［参考文献］

東郷多津(2007) 「英語を学習する意味が見いだせない学習者のための自律学習の開発方法（１）－再履修生対象のWriting classでの適用－」中部地区英語教育学会三重大会

東郷多津、望月紫帆、高橋朋子、中植正剛、山崎瞳(2007) 「英語を学習する意味が見いだせない学習者のための自律学習の開発方法（２）－「学習マップ」の導入効果と問題点－」日本リメディアル教育学会第３回全国大会

西之園晴夫、宮田仁、望月紫帆(2006)「教育実践の研究方法としての教育技術学と組織シンボリズム」教育実践学研究　第8巻第1号、日本教育実践学会

西之園晴夫、宮寺晃夫編著(2005)『佛教大学教育叢書　教育の方法と技術』ミネルヴァ書房